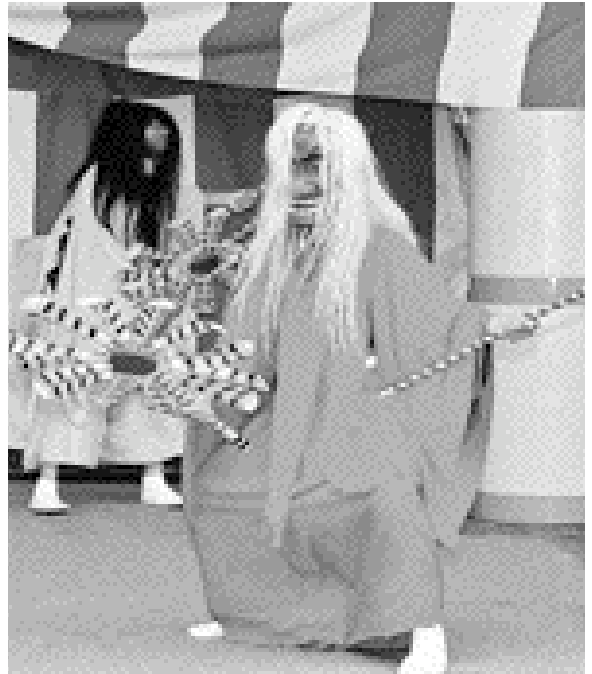


## 歴史を歩く④

町文化財紹介コーナー

# 「照日神社の神舞」



▲鬼神舞

弟のスサノオの乱暴に怒ったアマテラスが、天岩屋に引きこもって、戸を閉め切ってしまった。高天原（神々が住む天上世界）も葦原中国（人間が住む地上世界）も闇となり、様々な災いが起こった。

そこで八百万の神々が天の安河の川原に集まり、どうすれば良いか相談をした。オモイカネという神の案で、天岩屋の前で鶏を集めて鳴かせたり、鏡や勾玉を作らせたり、祝詞を唱えたりなどの儀式をした。極めつけは、アメノウズメという女神が、うつ伏せにした桶の上で、半裸になって滑稽な踊りを行った。神々はこれに大笑いし、盛大に盛り上がったのである。

自分が隠れているにもかかわらず、外が盛り上がっていることを不思議に思ったアマテラスは、岩戸を少し開けて覗き見した。その際にタヂカラオという神に引きずり出され、再び世界は明るくなった。

これが、『岩戸隠れ』の話である。神舞は、世界の豊穰と平和を取り戻したアメノウズメの滑稽な踊りをモチーフとして



▲杵舞



▲田の神舞

滑稽な踊りがあって、観客から笑いがおこる。照日神社の春祭りに来てよかつたと思つた。神舞は地元の中で、しっかりと生きていけると感じたからだ。

我々は間違いなく、自然の恵みや支えてくれる人やものによつて『生かされて』おり、それを感じ、感謝することで、『生きる』この意味を知ることができる。

そして、この心を常に忘れないために、古来より神仏は日常生活や地域の文化にいつも存在していた。照日神社の神舞もまた、そうして踊り継がれてきたのだ。

私と一緒に見学していた娘は当時2歳であつたが、さすがに『鬼神舞』を見て、鬼に食べられると感じたのか、硬直していた。「あれは、みんなを幸せにするありがたい神様だよ」とは説明してみたが…。

帰り道、娘が神舞で流れる囃子を口ずさんでいた。2歳児なりに、何らか心に残るものがあつたらしい。

（大崎町埋蔵文化財専門員 内村憲和）

2006年の3月、照日神社で行われているお祭りに初めて家族を連れて行ってみた。早いもので、あれからすでに一年が経つた。当日はあいにくの雨で、しかも風もあつて、本当に寒かつたのを覚えてはいるが、そんな悪天候であるにも関わらず、会場には多くの来場者で溢れていた。

用具の作り方など、手ほどきに記され、現在に至つても、その手ほどきの内容に基づき、忠実に継承されている。本来神舞は、夕暮れから夜通し踊り続け、日の出を見て舞い納めていたというこの舞は、高山（現肝付町）の神舞から都万神社に伝えられたとされているが、都万神社の神舞は大正時代の初め頃を最後に途絶えてしまった。つまり、現在も残っている照日神社の神舞は、貴重な無形文化財なのである。

田の神舞や杵舞に見られるように、照日神社の神舞には滑稽な動作が見られるのが特徴である。実はここに、重要な意味があるのだ。

『古事記』や『日本書紀』の中で『岩戸隠れ』という話がある。

さて、照日神社で踊られている神舞は、仮宿の都万神社の神舞を受け継ぎ、明治26年（1893年）2月5日に踊られ始めたものである。この時受け継いだ内容は、神舞の起源、十九手の神舞の舞言、